聖夜の願い

詩架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖夜の願い

【Ｎコード】
Ｎ８５９０Ｑ

【作者名】
詩架

【あらすじ】
クリスマスの夜、ボクの前にララと名乗る妖精が現れた。彼女はボクの願いを叶えにきたと言う……。

「あなたの願いを叶えにきました！」

赤いサンタクロースのコスチュームを着た、全長十五センチぐらいで、背中から薄い透明な羽根が生えている少女は、ボクの目の前に現れるなりそう言った。

「キミは誰？ボクの願いを叶えるってどういうことだい？」

当然沸いてくる疑問をボクは口にする。

「わ、私はララって言います。あなたが叶えたいと思っている願いを一つ、私言って下さい。私がそれを叶えます」

「どうして？」

今日はクリスマスだが、クリスマスは小さな少女（容姿から察するに妖精）が願い事を叶えてくれるという行事ではなかったはずだ。

「そ、それは……」

ララは黙り込んでしまった。

「クリスマスだから？」

ボクは彼女に助け舟を出してやる。

「確かに、この服はクリスマスに合わせてですけど、それとは関係ありません」

「じゃあ、なんで？」
「……。そ、そんなことより、あなたの願いを言って下さい！」
「理由を聞くまで、ボクも願いは言わないよ」
「そんな……」

ララは困り切った表情でボクを見つめてくる。ボクは素知らぬ顔でその視線を受け流す。
ララは口を開けては閉じを繰り返す。ボクに話すべきかどうか逡巡しているようだ。
ジッとまたボクをララは見つめる。

「……」

ボクは沈黙したままでいる。

「妖精の中で私達の種族は一人前と認められるために、誰かの願いを叶えなければならないんです。だから……です」

なぜかおずおずと、まるで悪い事をしてしまったことを、正直に親に話す子供のように、彼女は言葉を紡ぐ。
散々ボクに告げるかどうか悩んでいた割には、その訳は拍子抜けする程普通だった。
慈善事業でこんなことをする奴はいないんだから、別にすまなさそうな顔をする必要はないと思った。

「ふーん。それで、叶えられる願い事は一つだけなのかい？」

ボクが質問すると、ララは背筋をシャキッと伸ばし
「そうです。その通りです！」

と二度も肯定してくれた。

「ちなみに本当にどんな願いでも叶えることができるのかい？」

願いを言って「それは無理です」と断られるような無様な真似はしたくない。

「えっと、厳密に言えば、叶えられない願いもあります」

「どんな願いがダメなのさ」

要領を得ないララの答えにさらに突っ込んで訊く。

「そ、それはですね……。誰かの精神をねじ曲げるようなこととか、身体的能力の向上や治癒、時間の巻き戻し及び早送り、破壊または殺傷等の攻撃、あとは事実を覆すようなこと、です」

ボクはララの言葉を吟味する。

「すごくわかりにくいけど、言い換えるとようは何かを出すことしかできないってことだよね」

ララの言い分を解釈すると、そういうことになる。願いを叶えるというよりは、欲しい物を出すということぐらいしかできなさそうだ。

「その通りです。説明が下手くそですみません」

ララは俯いてしゅんとする。

「べつにボクが理解できたからいいんだけど。もう一つだけ訊くけど、キミにできる範囲だったらどんな願いでもいいんだよね？」

「はい。先程言ったこと以外であればなんでもどうぞ」

顔を上げ、ララははっきりと断言した。

「わかった。じゃあ、ボクの願いを言うよ」

ボクは一息つく。ララは一言も聞き漏らさないよう耳を澄ましているようだ。真剣な表情でボクを見据えている。

「ララに無限に願いを叶えてもらいたい」

「へ」

ララは間の抜けた声を出した。

「ど、どういうことですか？」

戸惑いながらララは恐る恐るボクに尋ねる。

「だから、それがボクの願い。キミが言っていた条件に反していないし、いいだろう」

しれっとボクは言い放つ。

「た、確かにそうですけど……」

まさかこんなことを願われるとは思ってもいなかったのだろう。ララは目に見えて動揺していた。

「なら叶えてよ」

ボクは追い討ちをかける。

彼女は途方に暮れたようだ。目があちこちせわしなく動いている。どう対処すれば良いのか、答えてくれる誰かを求めるように。

「べつに今日だけでいいからさ」

ララが困惑しきり、押し黙ったまま今にも泣き出しそうになったので、ボクはそう付け加えた。少しからかい過ぎたかもしれない。

「今日、だけ、ですか。……わかりました。一日だけならいいです」

ララは渋々とボクの願いを認めたが、不安げな表情は変わらなかった。

「他に私はどんな願いを叶えればいいんですか？」

「そうだなあ、とりあえずお金を出してよ」

現金であれば色々なことに使える。即物的な考えとしては定石だろう。

「わ、わかりました。えいっ」

ララは頷き、両手を前へ掛け声と共に出した。

ドーーン。

「……」

すごい音を立てて床に落下したのは、寺でよく見かける大きな鐘。

「これは？」

「お鐘です！」
「……」
胸を張る彼女にボクは唖然とする。どうやら本気で間違えていることに気づいていないようだ。
「ボクが言ったのは通貨の方のお金なんだけど」
というより、鐘はお鐘とは言わない気がする。
「えっ、お鐘じゃなかったんですか！？」
どうやら本気で間違えていることに気づいていなかったのか、驚くララ。
「うん。だからもう一回叶え直してくれないかな？」
「ごめんなさい。同じ願いは一回までしか無理なんです」
ララは申し訳なさそうに頭を下げる。
「なぜだい？ボクが願ったのは『お金』でキミが出したのは『鐘』だろう。ボクの願いは叶えられていないよ」
「そ、そうなんですけど、ダメなんです。確かに私のミスが原因で、あなたの願いは叶えられなかったんですが、同じ意図を持った願いは一回までなんです」
「ということは、言葉を換えてもダメだってことだよね」
「はい、そういうことになります」
ララはうなだれる。
まあ、お金に困っているわけでもないし、別に問題はない。願い

は他にいくらでも叶えてもらえる。

「じゃあさ、シャンパンを一杯くれるかい？」

ボクはテーブルを指さし、簡単な願いを口にした。

「は、はい。えいっ」

ララが再び、掛け声と共に両手を出す。

ボクの手振りに応じて、ララはテーブルの上に召喚する。

「……」

テーブルの上いっぱいにシャンパンの瓶が並んでいた。お約束な展開だ。

大方、言葉の意味を履き違えたのだろう。

「ボクは『一杯』のシャンパンが欲しかったんだけどね。『いっぱい』のシャンパンじゃなくてさ」

「ええっ！？」

「まあ、いいけどさ」

ボクはテーブルにシャンパンを一本だけ残しておき、あとは全部床に降ろして、一箇所に固めて置いた。

「ねえ、キミってお酒は飲めるのかい？」

「へっ、飲めますけど」

唐突な問い掛けにララは怪訝そうに答える。

ボクはワイングラス二つとコルク抜きを持ってきて、テーブルに

のせる。
足を組んで座ると、シャンパンの栓を抜き、二つのグラスに注いだ。

「座りなよ」

ボクはテーブルの向かい側を指し示す。
ララは戸惑いつつもボクと向き合う形で、テーブルの上にちょこんと正座した。
ボクは片方のグラスにストローを挿し、ララの前に置く。

「乾杯」

ボクはグラスを一方的に押し付ける。カンと小気味のいい音が鳴った。

「か、乾杯。あの、これって、私が飲んでいいんですか？」
「もちろん。キミ用に出したんだし」
「ありがとうございます。じゃあ、頂きますね」
ララは立ち上がると両手でストローを掴み、口に含む。ボクもグラスに口をつけ、喉に流し込んだ。

「願いはこれだけですか？」
シャンパンを飲み干すと、ララは再び正座をし、ボクに尋ねた。

「そんなわけないだろう」
ボクは自分とララのグラスにシャンパンを継ぎ足し言った。

「次はチキンを出してよ」
「チキンですか。えいっ」
ボクが要望を告げると、ララはすぐさま両手を前に出した。そして現れたのは……。
「ぴぃ」
黄色いふわふわした羽毛に包まれた、手の平に乗せられそうなくらい小さい、愛らしいひよこだった。
「これはひよこだよね？」
ボクは指先でひよこをつっつきながら訊く。ひよこはボクの指をうっとうしく感じたのか、くちばしでつつき返してきた。――痛い。
「ひよことも言いますけど、チキンですよ」
「……確かに英語でチキンはひよこのことなんだけどさ。ボクは調理された鶏が食べたかったんだけど」
ひよこのくちばしを避けるために、ボクは指を引っ込めた。
「そっちのチキンだったんですか！？すみません、私、意味を取り違えやすいみたいなので、もう少しわかりやすく言ってもらえませんか？」
ララは謝り、涙目になりながらボクを見上げた。
「わかった。じゃあ、七面鳥を出してよ。きちんと調理されたもの

をね」

チキンがダメなら仕方ない。まあ、本来、クリスマスにはチキンじゃなくて、七面鳥を食べるみたいだし、そっちの方が豪華だからいいかもしれない。

「えいっ」

テーブルの上にララは七面鳥を出現させた。今度こそ、ボクの願い通りだった。三度目の正直ということわざが脳裏によぎった。

ボクはフォーク、ナイフ、スプーンや取り皿を用意し、七面鳥を解体し始める。

七面鳥を食べやすい大きさに分解するのは、なかなか骨の折れる作業だった。

「いる？」

ボクは解体した一つを差し出した。

「あ、遠慮しておきます。私はシャンパンだけで十分ですから」

ララは断り、シャンパンを飲む時以外はずっと正座したままだった。

ボクは一人、七面鳥を食べる。個人的な好みとしてはチキンの方がおいしいなと思った。

ボクは他にも、サンドイッチにじゃがいものスープ、そしてショートケーキを頼んだ。

それらを食べつつ、何本か目のシャンパンを開けた時、ララが遠慮がちに口を挟んだ。

「あの、あなたの願いって、これで合っているんですか？」
「合っているよ。チキン以降、何も間違えてなんかいないよ」
「そういうことじゃなくて……。これが本当にあなたの望んでいる願いなんですか？」

ボクはグラスを口に運ぶ手を止めた。

「……本当だよ。どれもボクの願いの一つに入っているよ。今年のクリスマスは一人だったから、ちょうどよかったし」

ボクは淡々と言う。

「それって他にも願いがあるってことじゃないですか。……あなたが一番叶えたいと思っている願いは何なんですか？」

ララは真っすぐボクを見上げる。ボクはグラスをテーブルの上に戻し、息を吐く。

「さあね。でもキミには叶えられない。だから、今、こうしてキミと過ごしているだけで十分だよ」

ララとテーブルの上に並んでいる料理の数々を見渡し、ボクは苦笑した。

ボクは去年のクリスマスを再現していた。ララと七面鳥を除けば、あの時と同じだ。

ララが何か尋ねたそうにしていたが、ボクは気にせずにシャンパンを飲んだ。ララに、叶えることのできない願いを話すつもりはない。

ほとんど料理を食べ尽くし、残りはケーキのみとなった。ショートケーキは三号ぐらいの大きさで、生クリームの上に苺が乗ってい

るだけのシンプルなものだった。

「あ、ちょっと待って下さい」

ボクがケーキを切ろうとすると、ララが制止の声を上げた。そして飛び上がり、ショートケーキの上で手をかざした。

「えいっ」

もはやお決まりと化した掛け声をララが発すると、ケーキの上に文字が現れた。

“Ｍａｒｒｙ　Ｘｍａｓ　ｆｏｒ　ｙｏｕ.”

チョコレートソースでそう筆記体で書かれていた。

「メリークリスマスです」

ララは元気よく、ボクに笑顔を見せた。

「言うのが遅くないかい」

「気にしないで下さい！」

「まあ、いいけど。メリークリスマス」

ボクもそう言い、ケーキを二等分にした。

「半分、食べてくれない？いくらなんでも多過ぎてさ」

普通の人の二倍ぐらいは食べられる自信があったがさすがに一人で七面鳥を食べたのはこたえた。

「ごめんなさい。私は小さいので頂いても、うまく食べることができないんです。だから頂けません」
「そっか。なら明日にでも食べることにするよ」
ララの大きさを考慮することを忘れていた。彼女から見れば、このケーキは巨大だ。
「おいしかったですか？」
ショートケーキを食べ終わると彼女は正座したまま、ボクを見上げ尋ねた。
「うん、最高だったよ」
「それはよかったです」
ララは笑みを見せると立ち上がった。
「それでは、そろそろ私はお暇させてもらいますね。願い事はもうありませんか？」
「ないよ。でも最後にもう一回だけ乾杯してもらってもいいかい？」
ボクはグラスにシャンパンを注いだ。二人分注ぐと、瓶はからっぽになった。
「はい、乾杯」
「乾杯」
またボクはグラスを一方的に押し付け、中身を呷った。
グラスを置き、ララが飲み終わるのを待った。

「さよなら、今日は楽しかったよ」

彼女がストローから口を話すのと同時にボクは言った。

「本当ですか。それは何よりです。ホッとしました」

ララは羽根を動かし、宙に浮いた。

「それでは、さようならです」

そう告げるとララの姿は忽然と消えた。

数十秒、ボクは彼女がいた場所をぼけーと見つめていたが、不意に笑みが込み上げてきた。

ララはボクがわざと曖昧な言葉で勘違いするように仕向けていたことに、最後まで気づかなかったな。

ボクは鐘とシャンパンの空き瓶、あちこち動き回るひよこに目を遣る。

頭がぐらぐらしてきた。ボクはテーブルの上に突っ伏した。ひんやりしていて気持ちがいい。

最初は面白半分で彼女に願いを言っていたけれど、結局最終的には本気で楽しんでいる自分がいた。

それにしても、まさかこのボクが深酔いするなんて思いもしなかった。誰と飲んでもいつも相手の方が先に酔い潰れてしまっていたから、こんなことはなかったのに。

ララはまったく酔った素振りを見せなかった。だからボクも飲み過ぎてしまったのかもしれない。

薄れゆく意識の中、ボクは今日の出来事を回想し、自嘲した。

まさか今年のクリスマスも、こんな風に楽しく過ごせるなんてね。どんな行事にももう何の感慨も持たないと思っていたのにさ。

ボクの意識は闇に消えた。

次の日、ガンガンする頭を押さえ、ボクは目覚めた。
食べ散らかしたまま放置された食器類を見て、夢じゃなかったんだと漠然と考えた。
そういえば、ショートケーキがまだ半分残ったままのはずだ。ボクはケーキの上にのった皿を探す。

「……」

ケーキはひよこによって蹂躙されていた。

「ぴよ」

生クリームだらけになったひよこがケーキをつつくのをやめ、ボクと視線を合わせた。

「……」

ケーキは踏み潰され、つつき回されたのか、原形をとどめていなかった。ぐしゃぐしゃになっており、とても食べられそうな状態じゃなかった。

「ぴっ」

ボクは無言のままひよこを片手で掴んだ。手がべとべとになるが構わない。

「痛っ」

ひよこは身の危険を感じたのか、ボクの手を思い切りつつき、力が緩んだ隙に逃げ出した。

ボクは手を押さえながらひよこの行方を追う。

テーブルの上にはすでにいないようだ。無惨なケーキの残骸と空の食器類しかない。

床に目線を落とす。全部空き瓶になったたくさんのシャンパンと鐘が視界に入った。

ララが残していった物達をどうするか考える必要がありそうだ。大掃除をしなければならなさそうだ。

ひよこは鐘のすぐ傍にいた。

ボクはひよこを捕まえるため、痛む頭を我慢し立ち上がる。

大掃除よりもこのひよこの処断を下す方が先決だ。

ボクはララが出した厄介なチキンを追い掛けた。

ＥＮＤ．

（後書き）

この作品は某ＳＮＳのコミュにクリスマス用の小説として書いたのが最初でした。

話は当初、もっと短い予定だったのですが、主人公が考えていたよりもずっと捻くれ者で、長くなってしまった（と言ってもそこまでですが）お話でした。

皆様に少しでも楽しんで頂けたら嬉しいです。

それでは、ここまで読んで下さりましてありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8590q/

聖夜の願い

2011年10月8日17時53分発行